

賢い患者に なるために

① 治療法は自律的に選択しよう

② 医師と正直にやりとりすることが必要

自分にふさわしい治療法は自分で選ぶ。――。昨今、医師が複数の治療法を説明し、患者側に選んでもらうことが広がっています。私は説明をする時、自分なりの考え方も話すようにしています。

複数の選択肢があれば、それぞれのメリット、デメリットを説明し、「あなたにとって良いと思うのはAで、次にB、C」

といったように、です。医学的なことに加え、患者さんの年齢、仕事をしているかどうか、家族のことを踏まえて「ふさわしい」と思う方法を提示するのは、

仕事をしながら通院で抗がん剤治療をする際、遠方で通いにくいなら、通院間隔が長くできるような治療法を示します。何かあったら地元の医療機関で対

応できるようにお願いしておきます。

ただ、治療法を選択が、正しく理解した患者の自律的な判断であらばいいのですが、医師側の防衛姿勢の表れだったら困ります。

何かあった時に「患者が選んだのだから」と、言い訳にされないでしょうか。医学的な知識と経験において医師と患者には大きな差があり

ます。専門職として、それを忘れてはいけません。

それに、患者さんに、いろいろなことを正直に話してもらわないと「ふさわしい」方法を選べません。医師は病気を治せばいい、と言う人もいるかもしれませんが、医師も情報を手にしないとなかなか判断ができません。

洋品店で、あなたのサイズを

中村清吾 医師

なかむら・せいご 82年、千葉大医学部卒。聖路加国際



病院外科で研修後、93年に同病院情報システム室室長兼任。米テキサス州立大M・D・アンダーソンがんセンターなどで研修し、05年、聖路加国際病院プレストセンター長、乳腺外科部長。日本乳癌学会専門医。06年から聖路加看護大学臨床教授兼務。

聞いた店員が「この列に並んでいます。選んでください」と言ったら何もしないのがいいか、「これなんか、いかがですか」と言う店員とやりとりしないのがいいか。

◆ 例えがふさわしくないかもしれませんが、要は、病気に立ち向かうには、患者・家族と医療者、互いの歩み寄りが必要か、(詳細はアスパラクラブで)